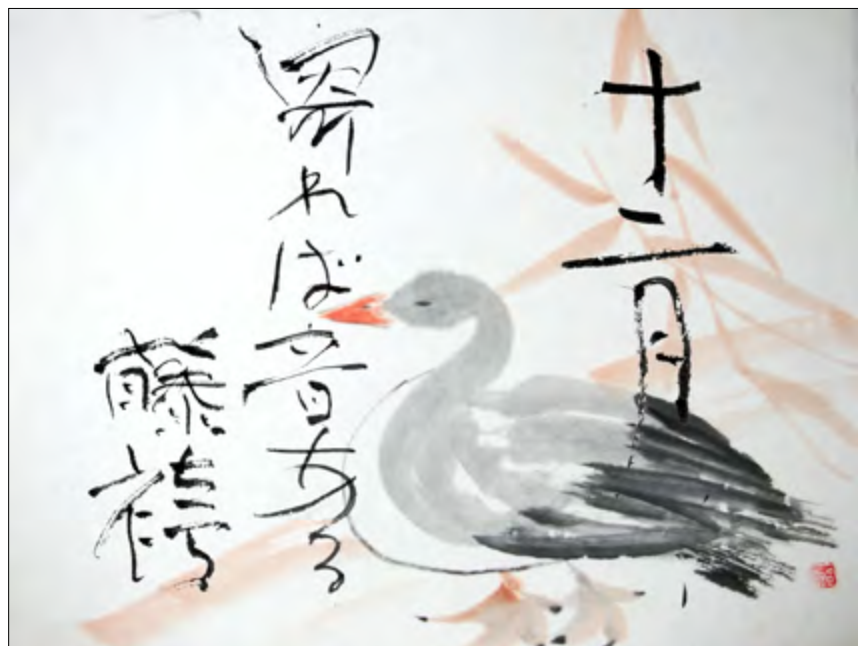


あを 12

2012



中野・城山公園



絵 堀内一郎

俳書 佐藤喜孝

あを

十二月



草の絮

佐藤喜孝

馬跳の背中が道に夏も饅ゆ

のうぜん花樋をあふるゝ通り雨

豊年の空飛んでくる寂聴尼

澁鮎の腸ををとこのおちよばかな

草の絮いちばんおそいあるき方

草の絮まきこむ歩速いまはなし

人死んだので歩いてゐる草の絮

選挙になると元気になる政治家がある。戦後入学した小学校の女先生が日本は戦争をしない国になりましたと嬉しさうに話してゐた。私もホッとした。私の入学の年から力タカナからひらがなになった。私はひらがなが好きだ。小説などで日本軍の下級兵への体罰を読むと空恐ろしくなった。二十歳になり徴兵に呼ばれぬ年となりホッとしたものだ。男の子が生まれた。これも二十歳を過ぎホッとした。その息子に子供が生まれた。男の子でなかなか凛々しい顔立ちである。あと二十年又心配しなければならなくなった。右手を冬空に突上げ国防軍だ、改憲だと大声が聞える。私のやうな考へは利己的身勝手で世界の大局を見ない狭量なのだらう。しかしせて非国民と云はれる人が生じない国であつて欲しい。

熟柿 齊藤裕子

白壁をおほひ尽して蔦紅葉

遠き日の父懐かしき熟柿かな

父呉れし山のご馳走熟し柿

三叉で父が巧みに挽ぐ熟柿

手の平に載せるよに呉れし熟柿かな

蒂をとり啜ってごらんよほら熟柿

父を恋ふ今に熟柿の時がくる

家からすこし離れた所に、自給自足程度の畑があった。畑の裏の小さい雑木林の中に、大きな柿の木が二本あり、秋になると家族総出で柿挽ぎをした。渋抜きをした柿や吊し柿は、いい御八だった。

あれはまだ小学校に入学する前だったと思うが、一度だけ父と二人で柿挽ぎに行ったことがあった。竹竿の先に切込みを入れ、木の枝を咬ませて作った三叉を使い、父は上手に柿を挽いでいった。時々、竿の先に挟み採った熟柿を、そおつと、そおつと降ろし、私に食べさせてくれた。透き通るように熟した柿の色、その甘味。父を独り占めたような幸福感。

あの日の父と二人の柿挽ぎの思い出は、今も私の宝物である。

赤とんぼ

篠田純子

水の秋鷺が鷺へと飛んで寄る

秋のてふ白湯一合を持ち歩く

夕野分母が居なくてちぢこまる

色なき風寄り添ふやうに足を組む

園庭を繋がつて飛ぶ赤とんぼ

この世での母は紫実むらさき

部屋の奥まで公園の金木犀

よく、私の俳句は川柳みたいだと人に言われる。駄目だとも面白いとも。私の中では諧謔（ユーモア）も俳諧味もすべて同じ解釈であるから、面白いと思ったらずぐに俳句にしまつのだ。と、少し気が付いてきた。

どうせなら川柳も勉強してみようと近所の敬老館の川柳教室を覗いてみた。三回程通ううちに俳句と川柳のおかしさの違いが解ってきたように思う。川柳に大事なのはうなづきだとか。俳句に大事なのは「詩」ではないかと思い始めた。

なのでユーモアを感じた時は川柳に、感動を覚えた時は俳句にと、心掛けるようになった。

若造りし過ぎたかしら敬老日
ドア開いてシルバースーツにダッシュする
逃足は速いがかけっこ遅かった

矩 形 定梶じよう

夜学の灯いま華やいで放課かな
青天に負けじ真っ赤く枝の熟柿
雲の影出たく山田のかゞしかな
藁塚の各々分相応の高さ
掘りすすむ曲がつて深き自然薯へ
てのひらにころがし木の実よろこばす
身に入みて障子の棧の矩形かな

霜柱俳句は切字響きけり

石田波郷

四十数年来私と句作りを共にする句寿夫さん。ある結社誌の同人を勤めていた時、合評会に句がとりあげられて、『や・かな・けりの多用に危惧を感じる』と評された。

俳句は切字で勝負すべき文芸であることを信じて已まぬ句寿夫さんは憤慨して、なんと即座に同会を脱退した。その後別の結社誌に入会して数ヶ月で同人になられたが、幸い切字を大切にする会だったので、安心して出句している。

そして、八十六歳になられた今も、句に携って六十有余年とは思えぬ新鮮な句を発表なさっている。

走っても歩いてみても夕立かな

中川句寿夫

能登半島

須賀敏子

福浦の風力九基天高し

千里浜の秋白波に日の没す

能登金剛秋の浦波荒々し

刈取りの終りし棚田素っ気無く

奥能登や休耕田に泡立草

緑剛埼白き灯台秋晴るる

能登に来て確かに見えし天の川

十月二十一日山仲間九人、マイク
ロバスで能登半島一周の旅に出た。
一日目・高岡市の国宝瑞龍寺と大仏
を見学。千里浜の渚ドライブは気分
爽快、お勤めのスポットだ。日本最
古の旧福浦燈台、巖門迄行けた。二
日目・松本清張「ゼロの焦点」のロ
ケ地になったヤセの断崖、能登金剛
海岸は厳しくも美しい。定規じよう
さんお住いの門前町総持寺祖院を参
拝。本堂は修理中であつた。輪島キ
リコ会館、本当の祭りを見たい。白
米の千枚田は刈入れ後でちよつと残
念。憧れの能登最北の緑剛埼燈台は
白く輝いていた。近くに奥能登・狼
煙郵便局・見附島。二つの橋を渡り
能登島を通過、和倉温泉へ。三日目・
富山市菓の廣貴堂へ。魚の駅生地で
海鮮丼。北陸路を堪能した。

賜 日 和

田 中 藤 穂

日短くなりましたねと別れけり

店先に通草銀座の人通り

甲斐なまり信濃なまりと秋の山

回復の歩みの確か賜日和

空半分鯖雲のあり訃報あり

近頃はピアノ聞えず柿の家

新米の値上げ今夏の暑かりし

東京駅

日本の同盟国だったドイツが敗れヒットラーは自殺した。戦争は間もなく日本もドイツと同じ運命をたどるだろう。日本はごつたる、私達の運命は、という重い不安が心を占めていた。私と友達は一ツ橋の学舎を出て当てもなく歩いた。その時友達達は、兄が海軍の予科練生で飛行機乗りになって国を守ると言っていたが訓練中の事故で命を落した。母が馳けつけて死ぬ前に三言三言話が出来たと静かに語った。それから私達はいつものお茶の水駅にゆかず、東京駅の前へ出た。五月だったと思ふ。東京駅前には銀杏の大樹が何本もあり、新樹の瑞々しい生命力が溢れていた。私達の重い心とつらはらな美しい緑はちよつと心に痛かった。

私達はそれからまた歩いて、焼跡の銀座を四丁目まで歩いた。少し喋っておおかたは黙って…………。

今日、戦前の姿に復原された東京駅を見にいった。駅の中は人が一杯、前の道も人がぞろぞろ、新丸ビルも丸善ビルのレストランも、人が長蛇の列。あの日緑を溢らせていた銀杏はなくなつて不粋な大きな排気口の建物がつ建っていました。

平成 二十四年十月 二十一日

秋 風 長崎桂子

鈴鹿峰墨の染め分け秋の風

秋風と道連になり途中まで

秋の風鼻を擦る魚焼く香

祭の児色なき風に衣の映ゆる

灯消し湯に浴するや鉦叩

十六夜に電柱数多二階窓

町外れ雑木紅葉の屋敷あり

依然として衰えない日中の日差しと例年よりやや高めの気温の初秋だが、日没からの気温は下がり九月下旬の天は高く澄み切って、月が満月へと近付いてゆく美しさを毎晩楽しみにしていたが、台風により十五夜は烈しい雨風の夜となった。

そして翌日の十六夜から臥待月までの月光は、又窓に素晴らしい贈物を届けてくれました。九月末から十月初めにかけてのこの気候はこの上ない至福のひとつでした。



早崎 泰江

酔芙蓉所用すませし一と日なり

しばらくは露草そつとそのままに

秋晴や刈込む音のよく響く

石路を受け皿とせり金木犀

コスモスの影追ふ友の一周忌

いぼむしり日に染まりゆき枯色に

吾亦紅かつては在りし土手の道

家から歩いて約三十分のところに荒川の土手があり、河川敷が広がっている。春にはよもぎ、つくし摘みなど、長閑に楽しめる所である。しばらく行かない間に、ここにも工事の波が押し寄せていた。建設省の大きな立て看板が出来、土手の道幅が広くなっている。荒川下流の洪水を防ぐための工事が進められているらしい。

かつて吾亦紅が咲いていたのは、この辺りかなと思いつつ山遠き関東平野を眺めていた。

私の生まれ育った大和盆地はやさしい山々にかこまれている。その地を離れ半世紀以上が過ぎたのだと思うと懐かしさが募るばかりです。

出 漁 森 理 和

燈一つ闇突き出漁冬近し

初冠雪母ちゃん紙からウオシュレット

別れ路や中天に月あればいい

木洩れ日の幹に茸のシャンデリア

お日様の程良き位置に中稲かな

茶の畠みかんの畑櫓に穂

竹藪の深深と垂る秋の雨

十月中旬に北海道札幌の友人が上京して来ました。池袋に独り住いして働いて三年目の息子さんの様子伺いが目的とか。(母一人子一人)

ドームと遊園地を見下ろす後樂園ホテルと一緒に一泊しました。何処でもいいとは言っていました。が、東京スカイツリーへ行きませんでした。

真下から仰け反るようにみあげ「おおつ」と、思わず発する圧倒的な存在感でした。曇り空で、展望ゼロの展望台ではと諦めて、真下のオープンカフェにライトアップされるまでいました。洋裁店を営む彼女は夢見る夢子さんでおしゃれ。お手製の白いフリル付ブラウス、黄色と茶系統のチェックのジャンパースカート。孫が履くようなフリフリのソックス。キャンデーキャンデーのロートル版でした。息子さんに歳を考えると言われたとか。お喋りが大好きで、私は勿論聞き役。因みにホテルは北海道フェアリー、その日の昼食と翌朝食も同じメニューのバイキング。夕食はお部屋で缶ビール・野菜サラダ・煮物・おむすび、コンビニもなかなかです。一日中お客様のお入りが絶えない筈です。遅い時間の節約の楽しい夕食でした。



吉弘恭子

空の青もらふ金蚤たかくたかく

微睡は夏の落葉のなかにゐて

口笛を吹く少年秋蝶過ぐ

戯れ猫の抜毛とび出す秋の宙

四阿にてふてふのねどこ秋日燦

帰路急ぐ松風五臓あらふ秋

般若湯とは摩訶不思議秋の宵

戦争が終つて、東京から疎開していた福島の子春から新潟の親戚を頼つて移り住んだ。繁華街のど真ん中に行つてしまった。警察官を辞めた父は祖父の作つていた下駄を作るようになった。置屋さんが軒を並べている、大きな割烹屋さんのある古町の隣になり格好のお店となった。父が作り、母がこれ又東京でやつていた洋服店と違つ商人になった。二人とも慣れないことであつたが、戦後の復興期に幸運にも商売が繁盛した。何でこんなことを書く氣になつたかは、新聞の番組欄で、森繁久弥の「夫婦善哉」を見たらあの頃の記憶が甦つた。株券招待の券二枚いつも私と父が見に行つていた。今頃になつて母はどうしていかなかったのだろうかと？二本立て月二回は見に行つた。父との思い出にはこんなこともあつた。まだ小学校の私は、大人の観る映画を嫌だといふ故言わなかったんだろうか。

冬 隣 赤座典子

地下道に一瞬走る薔薇の香

四十雀白き頬透く石榴の間

新蕎麦やゆつくり話す人になり

鵜の警戒警報発令中

実むらさき並替へてる診察券

惚といふ一字恐ろし冬隣

十月の殺伐として終りけり

上高地は日本で一番好きな場所。

五十年前、初めて訪れた時は鎌倉喜久恵さんも一緒だった。まだ、大正池でボートに乗ることが出来た。

ウェストンのレリーフは道沿いにある、皆が撫でていった。四十年以上前の新婚旅行の時は、突然の初雪で、一層素晴らしい景色に出会えた。

その後、燕岳から槍・穂高と縦走出来、河童橋に下り立った時の感激といったら！連れてきてくれた主人に「みつともない」と云われなかったら大泣きするところだった。

仲間達と出掛けては、黄葉の下で昼寝をしたり、梓川で鴨を眺めたり数え切れない思い出がある。

小梨（^{ずみ}梅）の花、壇の実等確かめることが出来たが、柳絮には未だ会えない。何とも心残りなことである。

冬 瓜

大日向幸江

冬瓜に厨の床を乗っ取られ

パラリンピック静かに終り秋光裡

逃げ出したインコも混ざり落穂食ふ

たつぷりと歩きて高し秋の空

妃殿下の一步退りて秋のバラ

小春日の読む人を待つ伝言板

わんさかと蝗の捕れて小遣に

冬瓜の神様へ

今朝もまだ三個の冬瓜が私の顔を見上げている。四日前、尾瀬に住む友人夫婦が持つて来た。心あたりのある人達に声を掛け貰ってもらったが、まだずんぐりと厨の床でのんびりとしている。

好きだと言っていた友人に今日電話をしてみよう、これで一個は出て行くはず。

高原育ちの冬瓜は大きく重い、一度足の小指をぶつけ、泣き出したい思いの痛さを味わった。来年の夏夫尾瀬に遊びにおいでと言つて帰った。あの夫婦自慢の冬瓜を私に残しきつと美味の地酒を楽しんでいることだろう。

冬瓜の神様、来年は不作にして下さい、あの夫婦の冬瓜をね。

晩 年

木村茂登子

足早に主客の座へと白き足袋

一分てふ時刻ときの隔たり菊花賞

尻上りして見る天の高さかな

蒼天や洗濯日和菊日和

一角は芋薯蓣の即売所

足弱にも欲しい止り木赤トンボ

晩年は色即是空秋の風

投句の締切り日が迫ってくると落ち着かない。

五句六句まで出来てもあと一句がまともらない。あをにお仲間入りさせて頂いた頃のことを思うと、何であんなに沢山句が出来たのかと今更不思議でならない。

今日もさんざん考え込んでいるうちに

晩年は色即是空秋の風

と、口について出た。

身体的に思はぬ故障の起きることの多いこの頃は只管健康を願うのみでその他には望むこともない。

九十才を越えて尚豊饒としておられる方は多い。身辺の家事万端は出来る限り長く自分でこなしてゆきたいと思っている。

前月抄

寒蟬や水に入るやう磴下りる

佐藤喜孝

関伽桶に残る水痕彼岸過

木村茂登子

天高し大地を蹴って逆上り

斉藤裕子

秋の雨遺骨ほっこり膝の上

篠田純子

茜雲手すさびにもつねこじゃらし

芝宮須磨子

長汀に一川注ぐ鰯雲

定梶じょう

見える時見えない時も秋の山

須賀敏子

蕎麦の花安達太良山は闇に入る

田中藤穂

秋の草パラリンピック見習て

長崎桂子



虹の橋空にかかるは太古より

早崎泰江

さざれ波ゆるる落葉に飛蝗をり

森理和

いつとなく雀の並ぶ秋の空

吉成美代子

波になるか潮にとけるか水海月

吉弘恭子

鮮麗なり黄を翻す秋の蝶

赤座典子

貝割菜朝の光に太りをり

大日向幸江

身に入めり「見に来てくれてありがとう」

赤座典子

外壁に「撤去OK」ほたる草

〃

つがる黄王さんさ岩手は元気です

〃

喜孝抄



十一月作品より

佐藤喜孝

閼伽桶に残る水痕彼岸過

木村茂登子

閼伽桶、彼岸と一句の中では近い言葉は禁句である。が「彼岸過ぎ」と僅かにずらした所に句にしてゐる。

天高し大地を蹴って逆上り

斉藤裕子

すつきりとした小気味の良い句。私は逆上りなどといふ高度な運動神経を持ち合はせてゐないのでどれだけ気持がよいことかと思ふ。

秋暑しコップの割れる通夜の席

篠田純子

秋の雨遺骨ほっこり膝の上

秋暑の通夜の席、どこかでコップの割れる音がある。通夜の席に響くガラスの割れる音はぎすぎすした心に突刺さるやうだ。

骨壺を抱く。お通夜、告別式などの儀式を経

て、故人が自分の所へ帰って来たやうにおもへる。骨壺は膝の上にはっこりとある。「ほっこり」に一種の不思議な安堵感とともに故人への慈しみが取れる。

ペンペン草手折り童にもどりをり

芝宮須磨子

茜雲手すさびにもつねこじやらし

ペンペン草・ねこじやらし・赤のまま・白粉花など子供の頃から親しんだ草々である。高齢になつてもこれらの草花を手にするると往時が蘇る。そのやうな感情を二句は淡々と述べてゐる。

長汀に一川注ぐ鰯雲

定樞じょう

いい月が出て犬小屋の中の犬

けふ時きし畝に影添ひ十三夜

など軟らかい表現の句のなかに漢詩読下しのやうな音調高い句に注目しました。じょうさんの環境を失礼ですがグーグルアースで見たことがあります。鳴砂で名高い琴ヶ浜の傍でした。さういふこととは関はりなくこの句、長汀・一川・鰯雲と名詞のみであくまでも大景をめざします。そこに動きを添へる「注ぐ」は眼目。俯瞰するやうなこの景に見入りました。鰯雲より注ぐに注意が行ってしまいました。

眠られぬ夜は花野を想ひけり

須賀 敏子

敏子さんはよく山に行かれる。汗して登った先にひらける花野は格別である。私はロープウェイで行った昔年の梅池自然園が思ひ出に残つてゐる。眠られぬ夜に夢のやうな美しい自然を思ひ出すのは至福の時である。

見える時見えない時も秋の山

秋の山に出掛けた。晴天で顕かな山の姿を好きただけ堪能する。霧や雲がかかり見えなくなつてもそこに山があると思ふと雲霧や雨も嬉しくなる。省略の見事に利いた俳句らしい俳句である。

蕎麦の花安達太良山は闇に入る

田中 藤穂

先ほどまで見えてゐた安達太良山。今は夕闇に紛れてしまった。麓の蕎麦畠の白い花が夕闇に浮んでゐる。この句も敏子さんと同じく見えぬ山の存在感を思つた佳句である。

秋の草パラリンピック見習て

長崎 桂子

パラリンピックのテレビで健常者よりも活き活きと活躍してゐる選手をご覧になって桂子さんも負けてはならじと庭仕事をなされてゐるのだらう。本当に誰でも見た人は年や足腰の衰へに甘えてゐられないといふ元氣をもらった。秋

の草の働きが今ひとつ私に解らないのが残念だ。

虹の橋空にかかるは太古より

早崎 泰江

虹をしばらく見てゐない。太空にかかる虹の橋などはなほさらである。太古より虹はこのやうにかかつてゐたのだらうと泰江さんは感動する。「太古より」といふ捉へ方にこちらも感動した。古の人も同じやうにこの虹を眺めたであらう。いや人間の出現以前からであらうとおもふと氣宇壮大になる。

かなかなの杜に家建ち秋ともし

カナカナもここ数年聞いてゐない。かうみると私は自然に触れる機会が少なすぎるやうだ。カナカナの杜といふと結構な樹影であらう。ある日その杜は取りはらはれ家が建つてゐる。灯もともし生活をしてゐる人がゐる。人はそれぞれ

れ家に住んでゐる。その家はどのやうな自然の上に立つたのであらうか。近くの家が空地になるとあつと云ふ間に雑草が繁茂する。この生命力には驚かされる。しばらくそのままにしてゐれば藪になり木が生え広ければ林になる。さういふ所に我々は家を建ててゐる。仕方ないとおもふが淋しいものだ。

さざれ波ゆるる落葉に飛蝗をり

森 理和

さざ波に落葉がゆれて泛いてゐる。よく見るとそこに飛蝗が乗つてゐる。秋も遅くなつて動きの鈍くなつた精霊飛蝗をみかけることがある。水に泛いた落葉によく乗つたものだと思ひさんは感心する。晩秋の一景である。

枯蓮にとびうつりたる飛蝗かな 山田 六甲

いつとなく雀の並ぶ秋の空
吉成美代子
実南天雀にしては尾の長し

飛びうつり遊ぶ小雀菊の花

二句目は違ふが身近な雀を句材にしてゐる。それぞれに優しいまなざしで外連味ない表現。好感の持てる作品である。

波になるか潮にとけるか水海月

吉弘恭子

海月は一見弱々しく見える。さういふ面を捉えた句。が人間より遙か昔から地球に存在してゐる。波まかせ、潮流まかせのようであるが、全く泳がないのではないらしい。

貝割菜朝の光に太りをり

大日向幸江

貝割菜は朝のやはらかい光にも育つやうだ。この繊細な感覚よりなほ繊細な俳句がある。

ひらひらと月光降りぬ貝割菜

川端 茅舎

地藏堂新た秋雨明るうす

赤座典子

身に入めり「見に来てくれてありがとう」

外壁に「撤去OK」ほたる草

つがる黄王さんさ岩手は元気です

特作「津波後一年半の三陸」は表題の通り

今回の津波に襲はれた三陸海岸を訪ねた作品。目に触れ手に触れた被災地の人や風物に驚き、悲しむ。そして励ましの目で見てをられる。「撤去OK」と書かなければならぬとは正に無惨である。「ほたる草」は現地を訪ねたものだけが使へる癒しの季語であらう。



八田木枯回想

その五

―夕焼けて西の十萬億土透く 誓子

阿部寒林

(承前)

木枯が義弟（山中）と一緒にぼくの居る長谷川萬治商店（長谷万）の本店に見えたのは翌年の昭和二十六年頃だったと思う。それまでは材木と無関係な仕事で日を送っていたらしく少々苦勞している様子だったので通り一ぺんの話で終らせた。

木枯は天狼への投句を休んでいたが材木商としての気持は失っていなかった。當時伊勢の久居^{ひさい}に名前は忘れたのでBにしておくが、この人が木枯と組んで深川木場へ紀州材原木の販売を始めた。木枯の紀州材仲介業はぼくの店（長谷万）を舞台に行うので順調そのもので、収益も少なからずあったと聞く。長谷万の信用大であった。或冬の寒い夕暮に木枯と共に青山へ赴いた。そこは木場四丁目の三ツ目通りに（水戸街道）面して店を張っている福久商店（福原）という紀州材とその他の材など扱っ

ているAクラスの間屋の主人の邸宅であった。如何なる縁か訊き洩らしたが、その離れを借りているとのことであった。

木枯夫人（智恵子）との初対面は「ウキグサ」会員山中智恵子時代より関心を持ちつづけていたひとであつたから旧友のようであつた。彼女は水など使うと苦痛を感じる病であるリウマチに若いうちから苦しまれ全治をしないことに嘆いておられた。この青山時代は長女夕刈の誕生の地でもあつたことを後年に知つた。

夫婦となり空につめたき日が一つ 木 枯

この名句に関して佐藤鬼房は次のように述べている。

「昭和四十年、山口誓子は拙句「齡來て娶るや寒き夜の崖」（読売新聞）に當つて彼の

夫婦となり空につめたき日が一つ

をよく覚えていて引用言及している。」

この句を誓子が激賞したのは兎に角として当時、東京天狼句会の散会后、ぼくに高屋窓秋が、「木枯君はいい句を生んでいますネ」と評価しているのを聞き後日彼に伝えたことを覚えている。この青山時代に木枯は青山服子という俳名で某誌へ投句して

いた。勿論上位であつたが注目されてはと思ひ中止したことがある。俳句捨て難しというところである。

木枯は俳句という虚業にせよ材木屋という実業にせよ、愛妻の難病という十字架を背負いつつ生活を伐り拓かねばならない。この辺りの実情であろうか、木枯没後の遺品整理の中から日記風の覚書が出てそれには上京以来の窮乏生活に己れの責任を家族に詫びている一文があり思はず今は亡き父の心情に涙を流したと長女夕刈がぼくに涙ながらに話をして呉れた。

木枯夫人智恵子は平成十六年十一月二十四日死去。あの青山での一刻が永久の訣れとなつたのである。晩年電話の中では何回か元気な声での会話が出来たもののいつもお礼ばかりの言で恐縮していた。晩年に入りぼくたちの「点線」に掲載したく自筆自句を何句か頂けて幸であつたが、今となつてはと思ひ平成二十三年の秋に『あを』の夜の句会の時に木枯の手に戻した。又この時が彼木枯とこの世での最後の同席となつてしまった。絶筆となつた夫人の句は葉書大の紙に毛筆、丁寧^{ひと}に書かれている。（十月号参照）

手足奪ひし神に真赤な薔薇を投ず
はるかよりわが寒燈を消すは誰

智恵子

北の蝶夕日にふかき罅のこす
斑猫は空の時間を記憶せり
新涼や身は剥落の未明音
忘却や夕日にむかふ懷手
別るもこの雪の橋渡らねば
愛惜や秋は渴きしまま暮れる

さてこの拙文は再び昭和に戻らねばならない。

深川木場と木枯

異質の俳句作家、三橋敏雄は木枯上京後、むしろ晩年近くに非常に二人は、親密になられたが、敏雄の「八田木枯讃」の文中に非常に感深き一文のあるを今でも覚えてる。

「私はつねづね、俳句は少年と老人のものと観じている。舌足らずな申しようになるが、壮年期の働き盛りの真情を俳句によって吐露することは極めて困難である。むしろ、その時期の俳句表現の断念を跳躍版とするこ

とによって、もともと我慢の形式である俳句を老年期に生かすことができるように思う。」

敏雄は八田ファミリーの倒産など未知の上で実業へ身を投じている木枯に対してこのようなかんそうを述べている。

やがて東京オリンピック以後の好景気の波が木材界にも押し寄せてくるのである。

木枯が現在の四谷三栄町の分譲地を手に入れたのもこの頃であつた。そしていちばんの収穫といえは長谷川萬治社長に接近出来たことである。

萬治社長は偶々富岡八幡宮の一角を借りて妾宅を建築中であつた。中野区には一千坪程の宏大な屋敷があつたが、本店が深川にある関係上ここを自宅同様にとつて建てたのである。この建築中に伊勢の片山、八田木材共同の名で萬治社長に高野杉の天井板四枚と腰板十枚程が送られてきた。今日までの御礼という意味で木枯はこの大杉の伐り倒した写真を示しながら説明をした。この板は悉く総全で驚く程美しい板であつた。天井板は長さ二米以上、幅一米以上、厚さ二厘余の寸法でこの幅で芯去りの全面が全であることは滅多にないことである。木枯の説明はさらに萬治社長を感動させた、それは高野山金剛峰寺の山林部に永年貢献した片山店主が十三号台風により倒産同様になった事に同情し、奥ノ院裏山に聳え立つ樹齢数百年の杉の大樹を特別に払い下げてくれたという話である。

(この項つづく)



長谷万邸址

「あとがき」参照



堀之内・妙法寺
2007.3月

竹内弘子

阿部寒林

芝宮須磨子

八田木枯

吉弘恭子

田中藤穂

大山夏子

森理和

篠田純子

斧田綾子

近世俳諧と漢詩文

六十一

王 岩

甲州鰍澤より十余里江陵千里一日に帰ることし

波の隴上には藤のしぐれ哉

淡々

『淡々句集』に載せる句作である。句題の表現には李白の「早發白帝城」を想起させるものがある。

朝辞白帝彩雲間、

朝に辞す

白帝彩雲の間

千里江陵一日還。

千里の江陵

一日にして還る

兩岸猿声啼不住、

兩岸の猿声

啼き住まざるに

輕舟已過万重山。

輕舟已に過ぐ

万重の山

永王の幕僚となっていた李白は永王が謀反とされたため、罪を得て夜郎に流された途中で赦免されて帰途についた。この七言絶句はその時のうきうきした気持ちを表現したものである。承句の「千里江陵一日還」が淡々の句題の典故となったのではなからうかと考えている。淡々は松木氏（1674—1761）、江戸時代中期の人である。唐詩の表現を自家薬籠中のように使いこなしていた江戸時代の俳人たちである。

せぐれわ郎一

一瞬にして母になる寒さかな

私には最悪の年とされていた寅鬼門も、それなりに慎重に過ごしてきたが、ここへ来て身体に現れ始めた。例により東一（国立医療センター）の整形外科、それから町の整骨院へマッサージ電気治療は初体験。

さて、国会軽視発言で、まだ混乱つづくが、俳句でも嗜んで居ればの感がする。「物いえば唇寒し秋の風」である。この所、地域での行事反省会、忘年会が山積町の代表だから、仕方ない。十一月に入って年賀遠慮の挨拶がくる。その中で高木童子氏「かまつか」、山口正三氏「暖流」の永眠を知らされた。新年卯年七赤中宮。私にとって、いや「萱」亀田虎童子様。「澤」藤田 宏様。両先輩リズムは好調な年に恵まれる。

△二〇一〇・十二・一五△

蛍光灯を鉄砲担ぎ十二月夜

町は静かな師走風景にある。近くの蕎麦屋に年越しそばの出前を頼むと「手が無いので」断られたが前金を置くと承知して呉れた。アルバイトを雇う余裕が無いのであろう。

仕事の仲間に会うと「暇だねエー」が合言葉に。

それにしても今日大晦日が帰省海外旅行への最高ラッシュになると言う。衆のようにに3月11日、東日本大震災から海外に種々トラブルが発生、大変な一年であった。

毎日新聞の朝刊、余録の「カルタ」の「き」（虚勢大國新將軍様）が締めくくりで最後「京」（京の夢 絆を世界に）が、せめてもの救いであり期待である。

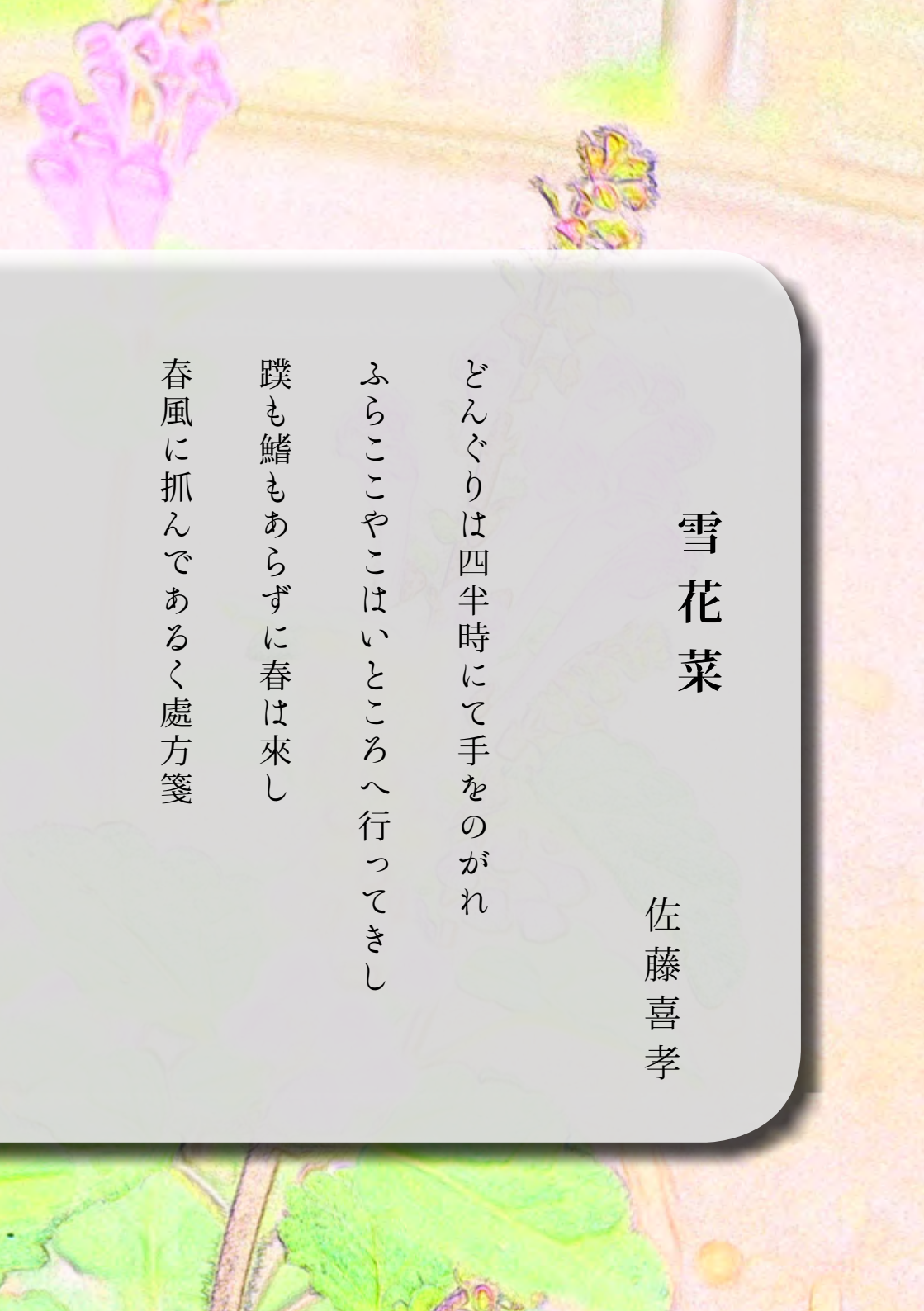
12月27日に大締め句会で佐藤喜孝氏を介して八田木枯氏の染筆を頂いた。

ハモニカの少年に秋いくそたび

木 枯

有り難し。少年は、また一步を踏み出す。

△二〇一一・十二・二七△



雪花菜

佐藤喜孝

どんぐりは四半時にて手をのがれ

ふらここやこはいところへ行つてきし

蹊も鱗もあらずに春は來し

春風に抓んであるく處方箋

とことばに地には着かない春の雪

紅梅は空のとなりでひらくなり

蝶の箱かさなり置けり唸り出す

はうといふしだれさくらのなかなりし

鶴泣かせ鶴を引かせて俳諧師

木枯よ雪花菜のなかに固きもの

あとがき

青梅街道を渡って江戸時代の象小屋の跡といふ碑を通り過ぎると下り坂になる。その坂の中ほどに昔法務大臣をした人の屋敷があつた。仕事で伺ふと犬に吠えられあまり行きたくなかつた。この跡地の一部に私の通ふ図書館がある。この坂の上に寒林さんの話に出てる長谷川万治の邸宅がある。一千坪と聞いて驚いた。象小屋碑の向ひである。高い石塀の上から鬱蒼とした喬木が道にはみだしてゐる。夏には近所の蝉が蝟集してここぞとばかり騒ぐ別世界である。

取壊すことは知つてゐたが昨年十二月二十七日夕刻通りかかると囲ひの一部が開いてゐて中をのぞけた。取壊した瓦礫の向ふに枝垂桜が立つてゐる。何ともいへぬ不思議な景である。桜が毅然としてゐるといふより悄然としてゐるやうに見えた。

晩年木枯さんも花の宴に誘はれて何度か来られたとお話しされてゐた。今は高い塀も取壊され建築用の鉄

板で囲まれてゐる。五階建ての高級マンションの建築中だ。その鉄板に木枯さんも見た枝垂桜の満開の写真がある。新聞の折込みにもこの桜が使はれてゐる。販売促進に一役買つてゐる桜である。他の樹は全く姿を消しこの桜だけが何故が残つた。

時々老夫婦が正装した不動産屋に連れられて現場で説明を聞いてをられる。

木枯さんはこのことは知らなかつた。(喜孝)

二〇一二年十二月号

発行日	十二月七日
発行所	東京都中野区中央2-50-3
電話	090-9828-4244
ファックス	03-6908-6038

印刷・製本・レイアウト

カット／恩田秋夫・松村美智子
竹僊房

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
郵便振替 00130-655526(あを発行所)

表紙・佐藤喜孝
乱丁・落丁お取替えます。

